

Why Did Mary Come from India and What Made It Possible for Colin to Walk? : Reading the English Climate in The Secret Garden —through the Changes of the Children in the Garden—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 亜希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1662

メアリーはなぜインドから来たのか？
コリンはなぜ歩けるようになったのか？：
『秘密の花園』に描かれるイギリスの風土

—庭における登場人物の変身から—

Why Did Mary Come from India and What Made It Possible for Colin to Walk?: Reading the English Climate in *The Secret Garden*
—through the Changes of the Children in the Garden—

佐藤 亜希子

キーワード：風土、イギリス文化、児童文学

I はじめに

フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett) の『秘密の花園』(*The Secret Garden*) (1911) は、数ある児童文学作品の中でも異色な存在であると思われる。なぜなら主要登場人物である二人の子供、メアリーとコリンは、児童文学史上まれに見る、見た目も性格も好ましからぬ子供達だからである。このことは『秘密の花園』に先駆けて書かれたバーネットの他の代表作、『小公子』(*Little Lord Fauntleroy*) (1886) と『小公女』(*A Little Princess*) (1905) の主人公と比べても明らかである。前者に登場するセドリックは、この上なく善意に満ち溢れており、周囲の大人を魅了する美しい少年である。そして後者で描かれるサラも、少々個性的ではあるものの、降りかかる不幸にも立派に耐える健気さを持ち、また自分では全く意識してはいないながらも十分に美しい容姿を備えている。そしてこれら二作品における子供達は最初から最後まで変わることはない。一貫して彼らの良さが描かれているのである。一方で『秘密の花園』におけるメアリーには‘ugly’, ‘contrary’, ‘disagreeable’ という形容詞がつきまとい、コリンは‘hunchback’, ‘hysterical’, ‘spoiled’ と呼ばれる。共に誰から見ても愛らしくも愛すべき子供でもないのである。ところが彼らは物語の終わりには見違えたように変身し、周囲の人々を驚かせる。なぜバーネットはこのような手の付けられない子供達を登場させたのだろうか？

この作品のタイトルは『小公子』や『小公女』と違い『秘密の花園』であるように、主人公は二人の子供というよりむしろ花園(庭)である。実際、作中でメアリーとコリンが嫌な子から好ましい子へ変化するのと平行して生まれ変わるのが花園である。そして彼らの変化とは、それぞ

れ異なる意味において非イギリス的であった二人が、イギリス的なものに触れイギリス人らしくなっていくことにある。つまり、作者はイギリス人というものを形作るイギリス的なものの本質を描くために二人の変った子供を登場させたのではないだろうか？ではイギリス人をイギリス人たらしめるものとは何か？その一つがイギリスの風土である。そしてイギリスの風土により作られる人間が風土との関係において造るものが、イギリスの庭である。この意味において、イギリスの庭と人との間には、イギリスの風土によって育まれるという共通項が存在し、よって二人の子供の変身が庭自体のそれと平行線をたどることは、極めて自然なことであると思われる。

『秘密の花園』は出版以来100年を過ぎて現在に至るが、そこには何らかの不変的な要素があるように感じられる。それは、子供達と共に変わる庭を通して描かれるイギリスの風土にあるのではないだろうか？そしてそれがこの作品の時の経過に耐えうる魅力であるように思われる。本稿では、メアリーとコリンがイギリスの風土に触れることによって変化する過程を追いながら、この作品において二人の子供達に関連してなぜ庭というものが重要性を持つのか、その意味するところを明らかにし、『秘密の花園』という作品の持つ不変性、つまりそこに表されているイギリス的なものの表象を読み解きたい。なお、筆者による「イギリス」という語の使用においては、厳密には「イングランド」を意味する。また、以下に引用するルイ・カザミヤンの著作『イギリス魂』における「イギリス」に関しても、著者は「イングランド」のことを指している。

Ⅱ インドから来たメアリー：他者により明らかになるイギリスの風土

インドで生まれ育ったメアリーは、イギリスに来た当初、周囲の人々により非常に変わった子供として捉えられる。彼女は黄色くやせており、それゆえ醜いと思われる。彼女の容姿の特異さのみならず、食欲のなさから始まり激しい気性、能動性の欠如、そして周囲の自然への興味の無さは、彼女がそれまで育ったインドの風土に起因している。「風土」とは、和辻哲郎によると「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」(9)のことである。イギリスにおいて好ましくないと受け止められたメアリーの性格や容姿は、彼女が生まれ育ったインドの風土を表し、そしてインドとは異なるイギリスの風土に触れるメアリーが好ましく変化する様において、バーネットはイギリス的なものの一つの側面、その風土を描いていると考えられる。ここでメアリーの動向を和辻の風土論に当てはめて、彼女が育ったインドの風土、そして彼女が新しくやって来たイギリスの風土がそれぞれ人間に及ぼす影響によるものとして解釈してみると、以下のようになる。

和辻曰く「インドはモンスーンの最も型通りに現れる土地である」(42)。モンスーン気候にあるインドにおいては「その暑熱が湿潤と結びついたとき、人はもはや忍従するばかりではない。モンスーンは人間に対抗を断念させる。かくて自然は人間の能動的な気力を、意志の緊張を、萎縮し弛緩させる」(43-44)。メアリーはインドではいつも暑すぎて無気力であったという(‘In India she had always felt hot and too languid to care much about anything’ (The Secret Garden 47))。そしてイギリスに来たばかりのメアリーは、メドロック夫人にこんなじっとして動かない子供は見たことがないと思われる(18)。また和辻はインドの「暑熱と湿潤との結合」による「生を恵むとともにまた生を脅かす」ような「自然の力の横溢」が「人間の感情の横溢となって現れ

る」(43)と言っているが、当初のメアリーは感情の起伏が実に激しい。インドで彼女は召使を豚呼ばわりしていたが、彼女のことを最初インド人かと思っていたと告げたメイドのマーサに対しても、メアリーは逆上している(30)。しかしそれまではお腹が空くということがどういうことか知らなかった(34)というメアリーが、外に出てイギリスの風土に触れることをきっかけに変化し始めるのである。

メアリーが来たイギリスのヨークシャーには、ヨークシャー・ムーアというイギリス特有の景観があった。彼女が初めてイギリスに来て興味を示しメドロック夫人に質問したのが、この単調な海のように続く景色が一体何かということだった(24)。メアリーが訪れた時のイギリスの季節は冬であり、そこにはインドにはない寒さというものがあった。和辻は「寒さを感じずということにおいて我々は寒さ自身のうちに自己を見いだす」(13)と言っているが、イギリスに来たメアリーはヨークシャー・ムーアを走り回り、その寒さを肌で感じることによって初めて自己を見出している。冷たい空気が頭から蜘蛛の巣を取り払い、新しい感覚を発見するのである(47)。自分には友達がいない、つまり孤独であると初めて気付いたのであった。和辻の言うように、人が「風土」において「間柄としての我々自身を、見いだす」(15)のであれば、確かにそれまでわがままで自分の事以外は全く考えたことがなかったメアリーが、周囲にある事物、殊に自然物に対しここで初めて好奇心を抱き始めている。それは屋敷の周辺にある庭や駒鳥の存在への興味である。そしてそれが更に他の人間への関心へと繋がっていく。これがメアリーの「風土における自己了解」(和辻 16)なのである。

それまで受動的で静的だったメアリーが、外に出て行き始めてから今度は自らの意志で庭造りに没頭し始める。ここで彼女がとりわけ庭というものに関心を持ったのも自然な成り行きだったのではあるまいか？和辻はインドにあるような「烈しい暑熱は「…」容易に征服されるものではない。人は暑熱を寒さのように人為的に防ぐことができない。また暑熱を閑却して人為的なものに没頭することもできない」(153)と述べている。一方「西欧の寒さは人間を萎縮せしめるよりもむしろ澁刺たらしめる。それは人間の自発的な力を内より引き出し、寒さに現れた自然の征服に向かわしめ、そうしてそれを従順な自然たらしめている」(152)。つまり暑熱のインドにおいては促されなかったであろう、寒いイギリスの風土がメアリーを外に駆り出し、更に「人為的な」ものの創造に駆り立てた。そしてそれが庭造りというものだったのである。ではなぜ庭造りでなければならなかったのだろうか？インドに対しヨーロッパの風土は和辻により「夏の乾燥と冬の湿潤」から性格づけられており、その気候は「雑草を駆逐して全土を牧場たらしめる」(106)とされている。よって、「ヨーロッパにおいては、ちようどこの雑草との戦いが不必要なのである。土地は一度開墾せられればいつまでも従順な土地として人間に従っている」(107)。また、「夏の乾燥、冬の湿潤、すなわち暑熱が湿気と結びつかない」ゆえ、そこでは人間が「自然の従順」を見いだすことができる(109)。つまりインドにはなかった従順な自然がある場所、そしてそのような自然が人間により手を加えられ手なずけられるものが、イギリスの庭でもあるのである。

和辻は『風土』において、特にイギリスを取り上げているわけではなくヨーロッパの風土をまとめて概観しているのであるが、中でもイギリスの風土は他のヨーロッパの国々と比べて特異性があり、そしてそれがイギリスにおいて庭造りを発展させた要因となっている。ルイ・カザミヤンが述べるように、周囲を海に囲まれた島国であるという独特の地理的、風土的条件を持つイギ

リス（英国）は「大洋の気流に常時洗われている」。それゆえ「海洋性気候」を帯びているこの国では「極端な寒さや暑さはめったに感じられない。夏と冬の平均気温の差は、大陸諸国におけるよりもずっと少ない。[...] 濃霧や海風が太陽の熱気を和らげ、極寒や豪雪と同じように、極暑の日々や時間も例外でしかない」（『大英国』27）のである。そしてジェーン・ブラウン（Jane Brown）は、この気候こそがイギリス（英国）の庭を育てるのであるとし（‘It is the British climate that encourages gardens, rather than any native tendency to green fingers or nonsense about ‘love of plants’ – at which the Dutch beat us hands down’ (169)）、庭造りにおいてイギリスの極端な気温差のない風土が、いかに植物を成長させるのに適しているかということ強調している。インドから来たメアリーがイギリスの庭において発見し体験したのも、まさにこの事であった。

そもそもメアリーがイギリスにやって来なければならなかった理由は、インドでのコレラの蔓延により両親を亡くし孤児となってしまったからである。和辻はインドにおける頻繁な疫病の流行は、この国のモンスーンに頼る耕作、凶年による飢饉、その結果の農民の栄養不良から起こる身体の抵抗力の低下の結果引き起こされるものであるとしている（43）。インドにおいてはつまり、メアリーが実際に唯一のコレラの生存者としてその恐ろしさを垣間見た当人であるように、その風土は人間に対して脅威となりうるものであり、時には死をも意味するのである。一方、イギリスの風土は自然を穏やかたらしめる。初めて秘密の花園に足を踏み入れた時、メアリーが“‘How still it is!’”（76）と思ったように、花園は発見当事まるで死んでいたかのように見えた。しかしそこには10年間というものの扉が閉ざされ人の手がきちんと入っていなかったにもかかわらず、雨と日光が穏やかに降り注ぐイギリスの温和な気候により、生命が密かに湛え続けていたのである。冬の間はヨークシャー・ムーアも不毛な土地であったのが、春の訪れと共にその生命力を現し出す。そしてインドでは春を見たことがなかったメアリーが（“I never saw it in India because there wasn’t any”（195））、春のイギリスの庭では一雨ごとに、彼女が植えた球根が芽を出し成長することを目の当たりにする。インドで生を脅かしかねなかった風土は、イギリスにおいては生をもたらすのである。

そしてイギリスの温順な風土に触れ始めると、黄色くやせすぎていたメアリーが、食欲も出て頬も血色よくふくらみ美しくなっていく。「風土」という言葉に「風」という語があるならば、メアリーはまさにイギリスの大地を吹き渡る風（‘wind’）や空気（‘fresh air’）に直に触れ健康になるのである。

She ran only to make herself warm, and she hated the wind which rushed at her face and roared and held her back as if it were some giant she could not see. But the big breaths of rough fresh air blown over the heather filled her lungs with something which was good for her whole thin body and whipped some red color into her cheeks and brightened her dull eyes when she did not know anything about it (44-45).

こうしてインド生まれで不健康であったメアリーが、イギリスの風土に応じてまるで生き返ったかのように変化するという点において、パーネットはイギリスの風土がイギリスの庭を造るのみならず、人間をも作ることを描いているのである。

一方で、もう一人の登場人物であるコリンも変化する。彼はイギリス生まれであるにもかかわらず

メアリーはなぜインドから来たのか？ コリンはなぜ歩けるようになったのか？ 『秘密の花園』に描かれるイギリスの風土（佐藤）

らず、家の中で寝たきりであったためにそれまで春を一度も見ることがない。つまりメアリーと同様にイギリスの風土にほとんど触れたことがなかった子供である。しかし彼の変身はとりわけ庭という場所において起こり、その意味でコリンには、同じイギリスの風土の影響を受けながらも、庭の中において育つ人間として、そこに成長する植物とのアナロジーが見出せる。つまり、バーネットはコリンを庭の植物に例えていると思われる¹。ではなぜ彼女は庭の草花と人間を同一視したのだろうか？ それは庭の植物が自然界の植物とは異なり、人の手かけられてこそ健やかに成長するものとして人間と同様の存在であり、また人の手が入る場所こそが庭というものであるということを表しているのではないだろうか？ つまりバーネットはイギリスの庭というものの文化的な在り方を描いていると思われる。ここでコリンの変化を見る前に、メアリーが見つけた秘密の花園の所属場所であるクレイブン家の存在に注目し、イギリスにおける庭が家との関係において意味づけられていることを確認したい。

Ⅲ 文化としてのイギリスの庭：庭の植物と人、庭と家、庭と国との同一性

メアリーによる秘密の花園の発見と再生は、彼女のコリンの発見と回復と時をほぼ同じくしている。つまり屋外において故意に隠されていた花園と、秘密の存在であったコリンがいた屋敷との同一性が存在する。それまで室内に閉じ込められ日照不足で栄養不足であった、つまり病弱であったコリンがいたクレイブン家という家が、家の外において同じような状態にあった秘密の花園という空間と重なっているのである。クレイブン家の屋敷の内と外におけるこのような相関関係により、バーネットはイギリスにおいて庭というものが持つ、家との緊密な関係を照らし出していると思われる。

和辻は西ヨーロッパにおける日光の乏しさを「西欧の陰鬱」(163)と呼んでいるが、南欧とは違った西欧的な風土の陰鬱さは、イギリスの殊に北部に位置するヨークシャーにも当てはまる。ムアの端に建つクレイブン家の屋敷は、メドロック夫人によりまさに陰鬱（‘gloomy’）という語により形容されている（“Not but that it's a grand big place in a gloomy way, and Mr. Craven's proud of it in his way – and that's gloomy enough, too” (19)）。メアリーが屋敷の中であてがわれた部屋も、子供部屋とは名ばかりで実に陰鬱であった。それはまるで森のようであり、つまりそこは自然と同一化しているのである。

She had never seen a room at all like it and thought it curious and gloomy. The walls were covered with tapestry with a forest scene embroidered on it. There were fantastically dressed people under the trees and in the distance there was a glimpse of the turrets of a castle. There were hunters and horses and dogs and ladies. Mary felt as if she were in the forest with them (27).

そしてメアリーは部屋ではほとんど独りきりで、誰にも構われずに放っておかれる。100もの未使用の部屋で占められた広大なクレイブン家とは、メアリーが気づいたように常に主人が不在の屋敷であった。つまり屋敷のこの陰鬱さとは人気のなさに関係し、いわば自然の状態に等しいことを表す陰鬱さなのである。メアリーは屋敷の中で奇妙な音にも気付く。それはムアを駆け抜ける（‘wutherin’）風の音であった。そしてその中に混じって彼女が聞き分けたものがコリンの泣

き声だった。つまり戸外の荒々しい風の音と家の中における人声が混じることにおいても、バーネットは屋敷がまるで外と同じ、手付かずの自然のような荒れ果てた場所であることを示唆していると思われる。

しかし10年間人が入り込むことなく自然と化してしまっていた秘密の花園に、メアリーという人の手が入りそれが甦ると共に、同じく10年間誰も手が付けられないほど荒れていたコリンも、メアリーという人間の手により救い出される。コリンはそれまで全く父親に愛情をかけられることなく、見捨てられていたも同然であった。彼の病とはヒステリーであり、つまりそれは自分が死ぬという思い込みに因るものであった。しかしメアリーにより背中には針の先ほどのこぶもないことを指摘され、生きる気力を与えられる。彼は家の中でも庭でも同様に物を食べ出し、また庭にも屋敷内にも同じように野生動物たちが入り込むようになる。そして秘密の花園に生命が溢れ出していくのと同時に、屋敷内における陰鬱さもなくなっていく。それは広い荒野や深い森という荒涼とした自然と化していたクレイブン氏の「家」が、メアリーが再生した庭を反映して、生き物たちの存在が感じられる「家庭」になったということを意味しているのではないだろうか？そしてそれは、家が人がいなければ単なる家屋（house）であり、家庭（home）であるためには人間の存在が欠かせないように、庭も自然とは同義ではなく、人の手にかけられ慈しまれながら育つ命のある場所であることと呼応している。「家庭」とは家の中に存在する「庭」であり、逆に言えば内にある家庭こそが外にある庭の表象であると言えよう。これが『秘密の花園』において、屋敷の内と外が互いを映し出すような関係にあり、また庭の中の植物とコリンという人間とのアナロジーが現れる理由ではないだろうか？

カザミヤンが「基本的な一つの人間集団の中核でもあり、また家族一同の情愛こまやかな理想が明確にされているこの「家庭^{ホーム}」という言葉は、他のどんな外国語にも訳し難いものである」（『イギリス魂』167）と指摘するように、houseと区別される英語のhomeという語は、イギリス文化に特有の意味を持つ言葉である。そしてバーネットは庭を家との関係において描くことにより、イギリスにおける庭の持つ文化的な重要性を表していると思われるが、以下に見るように、homeという言葉の広義性は、『秘密の花園』において庭にも及んでいる。そしてそのことから、イギリスの庭が更なる文化的な意味を持って機能する存在であることが読み取れる。それは母国としての象徴である。

英語では更に自国のこともhomeと言う。インドでのメアリーは自国というものを知らずに周囲の子供達にからかわれていたが（14）、実に孤児となったメアリーにとって自国であるイギリスは唯一血の繋がったこのいるクレイブン家がある所であり、つまりそこは家をも意味している。そしてもちろんイギリス、そしてクレイブン家は、メアリーが庭というものを初めて手に入れる場所でもあるのである。またhomeという語は人間のみならず植物の自生地という意味も持っている。メアリーは秘密の花園を見つけた時、唯一インドで見たことがあったバラがそこにも生えていることに気づき（75）、その花にかつてインドにおいて両親から見捨てられていたにもかかわらず生き残った自らの境遇を見出し、特別な思い入れを感じている。ブラウンによれば、イギリス人はそもそも自国以外の世界中から様々な植物を持ち込み、その風土に適応させて‘the English garden’なる庭を造ってきた（‘The combination of a cool temperate zone, warm wet summers and cool wet winters is the overwhelming reason why plants and ideas from all

メアリーはなぜインドから来たのか？コリンはなぜ歩けるようになったのか？：『秘密の花園』に描かれるイギリスの風土（佐藤）

over the world have found a second home in these islands' (170))。メアリーは、本来はコリンの亡き母のものであった秘密の花園を自分だけのものにしたいと強く感じ、そこが自分の居場所になるように庭造りに精を出すのであるが、その意味で、イギリス生まれのコリンのみならず、この地に第二の家（'a second home'）を見つけたインド生まれのメアリーにも、イギリスの風土にうまく適応し庭に自らの根をしっかりと生やした花のようなイメージが読み取れる。それは、この home という言葉の持つ多義性ゆえであろう。

そしてそれ以外にも、『秘密の花園』において庭は、上流階級に属する者も下層階級の者も、様々な相違点を持つ人間が集う場所としての役割も果たしている。しかし同時に彼らの間には、互いにいかに異なっているように見えながらも、類似点も見出されている。例えばメアリーと庭師のベンは共に見た目も悪く癩癪もちという共通点を持つ（41）。そして何よりも、それまで10年間もの間インドとイギリスという全く異なった風土と文化に生まれ育っていたメアリーとコリンという同年のいとこ同士が、実は二人とも似た者同士でもあったのである。ブラウンは 'the English garden is nothing of the sort, neither 'English' nor even 'British': gardens cannot be confined by nationalistic notions' (169) と言い、イギリスの庭とは、実際は決して純粋にイギリス土着の植物から成り立っているのではないことを述べている。つまりイギリスの庭は、そこに集められた多種多様な植物が共生することによって形作られているように、文化的にも雑多人種や階級の人間が混在し共存しているイギリスという国の縮図の象徴としても機能しているように思われる²。庭はこの意味で『秘密の花園』において、イギリスに特有の多様性を内抱する文化的土壌を象徴する母的な役割を持って描かれている。これが秘密の花園が故クレイブン夫人のものとして、時を経ても彼女の存在が感じられる場所となっている理由であろう。そしてこのような極めて多様な要素を庭という空間に一つに調和させているのも、まさにイギリスの穏やかな風土なのである。それが、秘密であった庭に唯一現れ、その場にいる全ての生き物に母のように慕われるソワビー夫人に体现されていると思われる。そしてこのようなイギリスにおける庭の文化的な意味合いを鑑みると、庭の中で成長するコリンとは、極めてイギリス的な人間を具現化しているのだと捉えることができる。

安藤聡は「不規則性、中庸、多様性と対照などが、イングランド式庭園を解説する重要な鍵語であるといえよう」（265）と言っているが、つまり庭という存在そのもののみならず、イギリスの庭の様式というものにもイギリス的なものが表されている。ではイギリスという国を構成する人々の内面、その精神はどのように風土により培われ、庭というものに反映されているのだろうか？最後にイギリスの庭園様式に表されるその国民性が、庭で歩き出すコリンに投影されている様を見てみたい。

Ⅳ コリンの再生：庭園様式に表されるイギリス人の精神風土

寝たきりだったコリンの自立と言うべき歩行がとりわけ庭において可能になっていることから、彼の変化にはイギリス特有の庭造りの在り方に象徴される、イギリス人の精神風土なるものが体现されていると思われる。それは言わば、メアリーの再現した秘密の花園がイギリス式の庭園様式を持つものであり、そこに表されるイギリス的な要素がコリンに獲得されていく過程で

ある。和辻はイタリアの庭園を人工庭園と呼ぶのに対し、イギリスの庭を「ただ自然のままの風景を一定の框に入れた」だけの「自然庭園」(280)と呼んでいる。ではなぜイギリスの庭は自然のままの様相を好む傾向にあるのだろうか？安藤は「風土と国民性には密接な関係があり、それを如実に反映するのが庭園であると断言してよいのかもしれない」(序4)と述べている。イギリス式庭園というものに表れているイギリス的な精神とは、自然と人工のどちらか一方に過度に偏るのではなく、両者がいかにも調和を持って提示されるということである。このことは、安藤によっても指摘されているように(84)、カザミヤンが「均衡への自覚こそが、イギリス魂の中にあって決定的なものであり、しかも核心をなすものである」(『イギリス魂』190)と述べているような、イギリス人にある「均衡」を好む精神の表れであると思われる。

それまで庭を造ったことがなかったメアリーは、動植物の育て方を誰よりも熟知している、自然を具現化したようなディコンの手助けにより秘密の花園を造る。つまり花園はあくまでメアリー(人間)とディコン(自然)という二者の共同作業によるものなのである。

“I wouldn’t want to make it look like a gardener’s garden, all clipped an’ spick an’ span, would you?” he said. “It’s nicer like this with things runnin’ wild, an’ swingin’ an’ catchin’ hold of each other.”

“Don’t let us make it tidy,” said Mary anxiously. “It wouldn’t seem like a secret garden if it was tidy” (102).

二人がこのように言って人の手が入り過ぎないように注意しながら花園を造っていることに、秘密の花園が自然との均衡を保ったイギリス式の自然庭園であることがわかる。そしてそこでコリンが歩くことができるようになったのも、秘密の花園がイギリス式庭園であったからなのである。

クレイブン家の屋敷に連なる周囲の庭は、‘clipped borders’や‘evergreens clipped into strange shapes’(35)があり、フランスの人工的な整形庭園を思わせる。そして安藤が以下に指摘しているように、フランスの庭園がフランス式の絶対的権力の誇示を表現しているのであれば、クレイブン家の屋敷を取り囲む庭園は、屋敷内の支配的な力の存在を物語っていると思われる。

ヴェルサイユの宮殿の広大な整形庭園(formal garden)は、当事全盛を誇っていたルイ十四世の絶対王政を体現していると考えられるであろう。規則的に左右対称にフォーマルな花壇を配し統一美を誇る十七世紀フランスに代表される整形庭園は人間による自然物の支配の象徴であり、一方で不規則性や多様性を特徴とする十八世紀イングランドに始まった風景庭園(landscape garden)は立憲君主国である英国における絶対的権力の不在、民主主義、個人主義などを暗示すると解読できる(序3)。

カザミヤンは「イギリス精神は、事物に向かって秩序と美の要求に身を屈することを求めない。求めるにしても、それは二義的であり、付加的である」(『イギリス魂』56)と述べているが、左右対称や統一された見た目の美しさを重視し不規則を許さないフランス式の、つまり非イギリス的な概念や美意識は、600年もの永きに渡って続いてきた由緒あるクレイブン家の唯一の跡取りであるコリンの曲がった背中や手足を受け入れない。しかしメアリーが再現した花園はイギリス式、つまりフランスの庭園様式と対する。屋敷内では相変わらず食欲がなく具合も悪い振りをし続ける一方で、自然のままの状態や不規則が奨励されるイギリス式庭園として生まれ変わった秘密の花園においては、コリンは規則を免れ活き活きと自由に振舞い、思い切り笑うことができる。

そしてそれが彼の歩行を可能にすることに繋がっている。つまりそれはコリンが自由や個人主義を尊ぶイギリス人らしくなっていることに他ならない。だからこそコリンは秘密の花園で歩けるようになるのであり、それはイギリス人としての在り方が表現されている、この庭においてでなくてはならなかったのである。

しかしながら、人が庭というものを造る一方で、人と庭は相互依存的関係にもある。なぜなら人は庭からも感化され作られるからである。それは庭で歩けるようになったコリンがたくさんの考え事をし始め（221）、自然科学的な観察眼を発揮し始めることに表れている。和辻は以下のように述べている。

自然が従順であることはかくして自然が合理的であることに連絡してくる。人は自然の中から容易に規則を見いだすことができる。そうしてこの規則に従って自然に臨むと、自然はますます従順になる。このことが人間をしてさらに自然の中に規則を探索せしめるのである。かく見ればヨーロッパの自然科学がまさしく牧場的風土の産物であることも容易に理解せられるであろう（113）。

庭で元気になったコリンが‘scientific discoveries’を行うと宣言しているように（222）、彼が示す自然科学への関心も、風土において自ずと養われたものであると思われる。そしてこの精神風土を育んだ土壌がヨーロッパ一般のみならずイギリスの風土にも当てはまるということは、コリンの行為がカザミヤンが以下に呼ぶところの、イギリス人の持つ「本能的自然主義」というものの表れであると思われることに明らかであろう。

カザミヤンは「事物の探求こそがイギリスの精髓」と言い、こう続ける。

この国の航海者や旅行家がそうであるように、研究者たちも遠くにあったりまたは隠されているさまざまな現実の発見を企てる。自然に関する多くの学問や、そこから派生する多くの技術は、彼らが好んで探求する領域である。情熱的で忍耐強い観察者であり、また同時に控えめな概括者でもあったダーウィンこそは、イギリスの自然科学者及び物理学者の典型的な存在である（『イギリス魂』133）。

更に「イギリス精神のこのような好みとこのような方向は、エリートの枠を超えて広く一般大衆にも分かち持たれている。さまざまな景色と同じように、すべての生き物－動物と植物－は、一種の共感的な関心の恩恵に浴している」。それゆえ「イギリス魂はその中に一種の本能的自然主義を持って」いるというのである。また「彼らの思考を育むものは、事物を体験することであり、そしてそれらを提示することである」（『イギリス魂』134）とカザミヤンは述べており、安藤も「経験と観察を重視する」姿勢が「イングランド的经验主義の基盤をなす」（272）と言っているが、このような経験主義的なイギリス精神は、庭においても確かに培われていると言える。なぜならイギリスの庭の歴史を紐解くと、川崎寿彦が言うように、「簡単に言えば〈庭〉という密室構造は、官能と性愛のうずまく売春窟ともなりえたし、祈りと瞑想のための礼拝堂ともなりえたが、また、科学的観察と研究のための実験室ともなりえた」（49）からなのである。

実にコリンは庭の中で植物の観察（‘watching things growing’（220））や実験（‘a scientific experiment’（221））という科学的な行為を行う。近代にイギリス独自の発展を遂げたイギリス式庭園は、庭の中の「自然」を重視したが、その自然は「審美的」なものであったと同時に「科学的」にも見られた（川崎 49）。コリンが自然を観察しそこに発見しようとしたものは、庭で自

分を立たせてくれ、また全ての人や物の中にも存在すると思われる魔法（‘Magic’）に関してである（‘Everything is made out of Magic, leaves and trees, flowers and birds, badgers and foxes and squirrels and people. So it must be around us. In this garden – in all the places’ (223)）。そして中山理によると、科学思想の萌芽とも言える「自然を他者として支配する理念」は、後の「自然を、実験的な操作によって科学的に分析しようとする近代の実証主義」につながるものであった（23）。コリンが続いて行う実験とは、強い体になるために運動をすることである。彼は“The Magic works best when you work yourself,” [...] “You can feel it in your bones and muscles” (252) と言い、まさに自らの体において自然の力を実証しようと試みているのである。

加えてコリンは庭で輪になって祈り詠唱する（‘chant’）ことにより、魔法の力を呼び込もうとする。ここでコリンの大祭司のように皆を率いている様は、自然の持つ魔法に魅入られている神秘家のそれを思わせる。カザミヤンは「イギリス魂は、物の持つ掟に容易に自ら進んで従うという意味において、真に現実主義的である」（『イギリス魂』37）と述べているが、イギリス人の現実主義が昇華すると神秘主義へ変化する傾向があるという。彼らの現実主義的な感覚が「直感的」なものになって行き、それが内面の世界に向かうと「観察者、風景画家、抒情詩人、神秘家など」の存在に表れる（『イギリス魂』38）というのである。よって「神秘への趣味」も「イギリス人の文学と生活の中にある大きく根深い一つの血脈」（『イギリス魂』125）なのである。つまりコリンが庭で魔法を取り入れようとする行為も、イギリス人の自然の神秘に傾倒する魔術的傾向を表しているに過ぎない。カザミヤンはまた、このイギリス人の現実主義を「生への実際的な要求」と呼んでいる（『イギリス魂』37）。コリンが庭で行う観察、実験、運動、そして祈りは、全てイギリス人の多大なる「生への要求」の表れであると言えよう。こうして庭の中で旺盛な生命力を見せる植物に感化されることにより、それまで死に瀕していたコリンに生きる気力がみなぎり、彼に“I am going to live forever and ever and ever!” (265) と叫ばせるに至るのである。

V 結び

カザミヤンは「イギリスの国民性は男性的気質を持っている」とし、「その気質が利己主義的生命力の気質と解き難く混じり合っている」（『イギリス魂』118）と言う。つまり、『秘密の花園』において、この男性的で利己主義的とも言えるイギリス人氣質がコリンにより体现されている一方で、そのイギリス的な精神を育む優しい母のような風土として在るのが、メアリーやコリン、そしてコリンの気難しい父にまで間接的に働きかけ変身させる、育ての親として描かれるソワビー夫人なのである。メアリーと同様に庭に出てイギリスの風土に触れることにより変化したコリンは、いつの間にかもう傲慢で暴君的な子供ではなくなっている。そしてメアリーは最後にはコリンが肖像画の中の亡き母にそっくりになっていることに気づく（250）が、コリンの亡き母が体现しているのが花園であり、このことはイギリスの風土が人と庭を共に形作るという事実を物語っていることに他ならないと思われる。そしてまた、人間自らも庭を造り、そこからさらに文化を創り上げていくように、風土、人と庭の三者における享受の関係は相関的である。この三者の緊密な関係は、庭の造り手の存在なしには成り立たない。つまりメアリーの登場によって初めて三者は結びつけられ、時が回り始めるのである。だからこそメアリーは、イギリスにやっ

メアリーはなぜインドから来たのか？ コリンはなぜ歩けるようになったのか？：『秘密の花園』に描かれるイギリスの風土（佐藤）

て来る必要があったのではないだろうか？ こうして互いに育み育まれながら作り上げられてきたイギリスの人、庭、風土の三者間の関係が象徴的に語られているのが『秘密の花園』であると言える。

そして「風景」は「イギリス国民の精神ばかりではなく、この国の文明の最も永続的要素をも表している」（『大英国』序言 16）とカザミヤンは述べる。とすればメアリーによって体験されたイギリスの風土に加え、同じく風土によって形造られる庭を通してコリンに見出されるようなイギリス人のイギリス的な精神も、永続性を持ち続けるはずである。このことが『秘密の花園』に不変的な要素を与えていると思われる。

注

- 1 Phyllis Bixler によれば、バーネットは *Before He Is Twenty* (1894) という随筆集の中で、子供を大切に養育されるべき植物や花に例えているという (58)。
- 2 安藤聡によると、イギリスで庭とイングランドを同一視する見方はシェイクスピアの頃からすでにあり、ラディヤード・キプリングも自作の詩の中で「庭園をイングランドの縮図として捉え、またその庭園の中にナショナル・アイデンティティの拠り所を見出している」(232) という。

参考文献

- Duffy, Maureen. *England: The Making of the Myth from Stonehenge to Albert Square*. London: Fourth Estate, 2001.
- Paxman, Jeremy. *The English: A Portrait of A People*. London: Penguin, 1999.
- 藤岡糸子『大胆不敵な女・子ども－「小公女」「秘密の花園」への道－』燃焼社 2003 年
- ニコラウス・ベウスナー『英国美術の英国性－絵画と建築にみる文化の特質－』友部直・蛭川久康訳 岩崎美術社 1981 年
- マーガレット・ドラブル『風景のイギリス文学』奥原宇・丹羽隆子訳 研究社 1993 年

引用文献

- Bixler, Phyllis. *Frances Hodgson Burnett*. Boston: Twayne Publishers, 1984.
- Brown, Jane. *The Pursuit of Paradise: A Social History of Gardens and Gardening*. London: Harper Collins, 1999.
- Burnett, Frances Hodgson. 1905. *A Little Princess*. London: Puffin Classics. 1961.
- . 1886. *Little Lord Fauntleroy*. London: Puffin Classics. 1994.
- . 1911. *The Secret Garden*. London: Penguin Popular Classics, 1995.
- 安藤聡『英国庭園を読む－庭をめぐる文学と文学史』彩流社 2011 年
- 川崎寿彦『庭のイングランド－風景の記号学と英国近代史』名古屋大学出版会 1983 年
- 中山理『イギリス庭園の文化史－夢の楽園と癒しの庭園』大修館書店 2003 年
- ルイ・カザミヤン『イギリス魂－その歴史的風貌－』手塚リリ子・石川京子訳 社会思想社 1971 年
- .『大英国－歴史と風景－』手塚リリ子・石川京子訳 白水社 1985 年
- 和辻哲郎『風土－人間学的考察』岩波書店 1979 年